届き、伝わる話し言葉を求めて

1956年、埼玉県秩父市生まれ。NHKアナウンサー。経済関連番組の企画制作、司会を幅広く務め、後進指導や局外向け講師としても活躍中。

NHKアナウンサー　肥土貴美男（あくとき みお）さん

届く声とは「大声」ではない

「相手に伝わる声というと、大声をイメージされる方が多いんですが、実際には声の大小よりも、高低の幅とメリハリが大事なんです」（肥土さん・以下同）

相手を威圧する程の大きな声で話しても、話の内容は伝わりにくいもの。肥土さんは「4～5メートル先の人に届く声で、息を使って、文意をまとめて話す」ことを勧める。

「仕事で学校にお邪魔することもありますが、クラス全員での音読が調子読みになりがちなのは残念ですね」

子どもたちの意識が「声をそろえる」ことに集まりがちな全員での音読では、無理からぬ部分もあるだろう。けれども、言葉の意味や文脈を飲み込んで読めば、その様子はまるで変わってくると言う。

28年のアナウンサー生活を送ってきた肥土さんに、話し言葉の極意をお聞きした。

映像に負けない強さを

アナウンサーと言えば、真っ先に思い浮かぶのはテレビニュースだ。アナウンスという仕事はラジオ放送の開始と共に生まれたが、今日のアナウンサーは、映像との「調和」抜きには語れない。

「人間にとって、視覚の影響力は大きいものです。テレビの中の情報量を比較すると、映像とコメントの影響力は9対1といったところでしょうか。ですが、コメントがなければ映像が理解しにくかったり、メッセージが正しく伝わらなかったりする。これもまた事実なんです」

現在では自らアナウンサーであると同時に、後進を指導する立場も重みを増している肥土さんは、こうも語る。

「新人アナウンサーの研修では、ニュースを読むトレーニングをします。このとき、あえて映像を見せず、原稿を読むことに集中させる。なぜなら、視聴者側だけでなく、伝え手であるアナウンサー自身も、ともすれば映像に神経を奪われてしまうからです。原稿を相手に伝わるように読もうとしているか点検する中で、内容のとらえ方や、伝え手としての気構えまで見えてきます」

まさに、アナウンサーという仕事の難しさが感じられるエピソードの一つだ。実際、私たちは、世の中にあふれる情報を正しく理解したり、何が大事なのか取捨選択したりする際に、言葉という音でとらえて判断している。言葉が放つ音の大切さは、意外なところで業務にも役立つと肥土さんは言う。

「私が担当した仕事に、リアルタイム字幕というのがあります。例えば、スポーツ中継の実況の声と大歓声とがかぶってしまうと、アナウンサーの声を認識できず、声を文字にすることができません。そこで、音声認識システムを使って、実況とは別に、私たちがしゃべって言葉を文字に変換します。これをリスピークと言います。文字数が限られることや変換システムの制約から、リスピークにはテクニックが求められます」

このリアルタイム字幕で表示されるのは16文字×2行の文字情報。それが大相撲中継なら2秒ごとに置き換わっていく。「無駄な言葉を省いて短くすることはもちろん、コンピュータが認識しやすいように、常に平静に読み上げる必要があります。実況アナウンサーが絶叫していても、私は『……○×選手、金メダルを獲得しました……』と、淡々と言葉にしなければなりません。感情を高ぶらせず、言葉を意味の通りに伝える話し言葉の力が求められます」

これもある意味、他の情報に引きずられない話し言葉の強さが求められる一例だろう。同時に、何をどう話すのかという組み立ての工夫や、簡潔に話すということ自体が、伝わる話し言葉に近づく決め手になるのだと気づかされる。

原稿を読む≠棒読み

リアルタイム字幕の話から、伝達のための話し言葉には「冷静さ」が求められるということにあらためて思い至る。しかし、それはただ淡々と読むのとはまったく違う。

「日本語の特徴は大きく2つあります。漢字文化であることと、SOV型（主語-目的語-動詞）であることです。漢字には一字一字に情報が詰まっていますから、アナウンサーはまず、そこに含まれる意味を理解して読むことが前提となります。一方、日本語は文末まで聞かないと意味が伝わりにくいSOV型の言語。意味をとりちがえると、読みがちぐはぐになってしまいます」

冒頭、肥土さんが「棒読み」を戒めたのは、こうした日本語の特質を知り抜いているためだ。

「私たちが原稿を読むとき、書き言葉を話し言葉に変換する作業をしますが、まずその内容を整理して、筋道を決めて話すことからスタートします。さもないと、正しい情報の伝達ができません」

もちろん、ときには実況中継など、あらかじめ原稿の用意や内容をつかんでおくことができない場合もある。

「そうした場合は、アナウンサー自身がその状況を理解できるよう努めます。事故中継なら現場記者への問いかけなどを通じて、現場の様子を図表に描けるように情報を整理する。スポーツ中継なら、感情にまかせて絶叫するのではなく、状況を的確に伝えながら解説者と内容を深めていきます」

アナウンサーは結局、自らが理解できていないことは伝えられない。ニュースにせよスポーツにせよ求められるのは、伝える情報を自ら理解し、どう話せば人に伝わりやすいかを瞬時に判断する能力だ。

繰り返しを恐れずに

「書き言葉と比べ、話し言葉は、瞬時に消えてしまう『音』でしかないのです」

「講師として学校にお邪魔すると、先生方から『話し方について勉強したことがない』と言われることが多いんです。かつて勉強と言えば『読み・書き』だったためでしょうか。先生方にも子どもたちにも『話す・聞く』を意識したコミュニケーションを豊かに持ってほしいですね」

「アナウンサーという立場から、『話す』ことを中心にお話ししましたが、話すためには『聞く』ことがとても大切です。テレビなどを通じて話す場合は別ですが、話し言葉は対話の中で使われることが一番多いんですから当然ですね。掛け合いという意味以外にも、自分の言葉を豊かにする上で欠かせないのが「聞く」姿勢とその能力だと思いますよ」

インターネットや携帯電話の急速な普及は、こうした話し言葉の特徴を一層加速させている。

「正しい話し言葉の伝え手という役割を期待されているNHKアナウンサーですが、世の中の言葉の変化と無縁ではいられません。もちろん、ただ流されるのではなく、正しい言葉、整った表現を繰り返していくことが大切だと考えています」

読み直し可能な書き言葉と違い、話し言葉は聞き返すことが難しい。「結論を先に」「分かりやすい言葉で」「簡潔に」など、共通する原則は多いものの、書き言葉では読み手が行える「反すう」を、話し言葉では話し手が手助けする必要がある。

「ですから話し言葉は、結論を繰り返すことがとても有効です。まず結論から、そして詳論に入り、結論に戻る。この繰り返しですね。くどいと言われようとも。情報を正しく伝える上では大切なことなんです」

誰にでもしっかりと伝わる話し言葉にするために、リフレインを恐れない。結論の繰り返しと、基準となる言葉遣いの繰り返しには、共に話し言葉のプロならではの極意が込められていた。

肥土さんの 伝達の極意

- 伝える情報を自分のものにして話す
- 相手が理解できる言葉で話す
- 結論から話し、その反復を恐れない